
遊戯王リリカルなのは5 D's ~絆を繋ぐ歯車~

漆黒のカリスマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王リリカルなのは5D・S 絆を繋ぐ歯車

【Nコード】

N3677T

【作者名】

漆黒のカリスマ

【あらすじ】

遊星に未来を託し闇に飲まれてこの世から消滅したと思われていたブルーノ。しかし、彼は新たな世界で光を超える！！

プロローグ（前書き）

「光よりも速く！」のブルーノになったように私が執筆しましたが……駄文ですみません……。うまくできてないような気がします。

プロローグ

光も入り込まない闇の空間で2人の青年はD・ホイールで肩を並べながら走っている。赤いD・ホイール遊星号になっているのはチーム5D'sのリーダーでありこの世界の希望、不動遊星。そしてその隣に居るのはチーム5D'sの一員であり遊星にアクセルシンク口を教えた未来からの訪問者、ブルーノ。2人は今ブラックホールに飲み込まれている。そんな中、ブルーノは遊星を見つめ微笑みながら語る。

「遊星、見せてもらったよ。君の可能性を」

「……！」

「遊星！この世界を救ってくれ！！」

彼ならば、きっと世界を救ってくれる。そう信じてても良いぐらい遊星の可能性を見た。

「世界を救い、そしてZ・ONEを救ってやってほしい！」

「どういうことだ？お前は、この世界を破滅させるために闘っているんじゃないのか？」

僕の言葉に遊星は疑問に思っている。だが、それもそうだろう。僕は世界を破滅させようとしているZ・ONEの仲間なのだから……。ただ、Z・ONEはそんな事は考えていない。君だったらZ・ONEのしようとしていることを分かってくれればずだ。

「僕は君達と過ごした時間で何度となく不可能と思つた事を破つてきた君の姿を見てきた！そして…記憶を取り戻した時、僕は決心したんだ！…遊星の可能性を信じようよと！！」

「…！俺の可能性を？」

「やばい、デルタイーグルも限界にきている。早く伝えないと…遊星に！デルタイーグル…もう少し耐えてくれ！」

「君なら絶対できる！遊星なら自分の限界を打ち破ることができる！だから、僕は新たな力へと導くデュエルを始めたんだ！それがデルタアクセルだっ！！」

「君ならきつとできるはずだ…」。

「君ならできるはずだ、君だけの…デルタアクセルを！」

「！お前は最初から俺のそれを教えるために！？」

「そうだよ。アクセルシンクロを取得してからずっと思っていた。君なら…きつと僕をも超えるデルタアクセルを取得できると…」。

「遊星とは違う出会い方をしたかった…そうすれば、本当の仲間になれたかもしれない」

「アンチノミー！いや、『ブルーノ』！！」

「え？今、僕のことを…『ブルーノ』って…」。

「お前は俺たちチーム5D・sの…俺の仲間だ！ブルーノ！！」

仲間…この僕を…。

「この僕を…仲間だと言ってくれるのか？遊星」

君達をずっと騙してきた、こんな僕を？……君はやっぱり優しいね。そして、それが君の強さである。

……仲間…か。僕は皆を励ましながら皆とともに闘っている遊星の姿を見ているのが好きだった。

「…そこに君の無限の力と可能性を…感じたから！！」

「ブルーノ……」

ぐ！そろそろデルタイーグルも限界か。闇の空間が近づいてくる。

「ブルーノ！早く！飛び移れ！！」

「無駄だよ。言ったはずだ、このコースを抜けるにはどちらかが消滅するしかないんだ！」

「ブルーノ！！」

遊星…皆…本当に君達と過ごした日々は最高に楽しかった。今でも…ずっと続けば良いと思うよ。…それほど…楽しかった。

「何をやる気だ！ブルーノ！？」

「遊星！君は僕の希望だ！！アクセルシンク口は光をも超える！！」

光をも超え…未来を切り開くんだ!!」

未来は…君に託されている!僕にできることは…もうこれしかない!!

「いけえええつ!!遊星ええええつ!!!!」

僕が、君をこの空間から救い出す!!

「!?ブルーノ!!ブルーノ!!」

遊星……。

「ブルーノオオオオオオオオツ!!!!」

そして、遊星に希望を託し…絆を繋ぐ歯車は……この世から消滅した。

プロローグ（後書き）

次の1話からブルーノがリリカルな世界に行きます。

デュエルの方は…《TG》は全部OCGのほつが良いのかな？

次はいつになるかは分かりませんが応援宜しくお願いします!!

第1話「自分の使命」(前書き)

すみません、先に言いたいことがあります。今回の小説はA・S編
終了後のなのは達です。

つまりは……年は15歳!!だったかな?詳しいことはアニメや漫
画でご確認ください。多分漫画の方が言いと思います。

それでは本編へどうぞ!!

第1話「自分の使命」

青空を照らすように輝く太陽、その輝きの下で楽しく喋り合う人々、今日は四月…新しい道へと進むための大切な1年の始まり。そしてここに新しい道へと進む1人の少女がいた。

「行つて来ます、母さん」

彼女の名はフェイト・テストロッサ・ハラウン、旧名フェイト・テストロッサ。6年前はとある事件で心に傷を負ったが、仲間や友のおかげでここまですくすくと成長した。

「あ、フェイトおはよう！いつも元気なブルーノちゃんだよ！！」

「うん、おはようブルーノ」

そして、今フェイトに異様な挨拶をした男の名前はブルーノ。今作品の鍵を握る人物である。いつも元気で周りの人からも人気がある。趣味は機械いじりと修理…特技と言っても良いだろう。

…それにしても…ブルーノの挨拶にずいぶん慣れてるようですね…フェイトさん。

「フェイトもとうとう最高学年かあ…時間が過ぎるのは早いもんだね…」

「うん。ブルーノと出会って…3年だったよね？…懐かしいなあ…」

窓から見える雲1つ無い青空を見上げて2人は始めて出会った時の

ことを思い出ししている。2人の出会いは今は明かせないがとても奇妙な出会い方だったそうだ。

「ねえフェイト」

「何？」

「学校は行かなくて大丈夫なの？」

「あ」

昔を思い出し懐かしんでいるとブルーノが不意に話しかける。フェイトは頭に？マークを浮かばせるような顔でブルーノを見る。

そして時計を指し送れちゃうよ？となぜか笑顔で伝える。フェイトは気づいたらしく、ブルーノと母のリンディそしてアルフに「い、行って来ます！」と慌しく出て行った。

「ふふ、フェイトは相変わらず天然ねえ」

「ははは。それがフェイトらしいところだと僕は思いますけど？あの天然さと優しさで僕も救われましたから……」

フェイトが出て行った後にリンディは我が娘の姿をクスクスと笑いながらブルーノに話しかける。ブルーノは苦笑しながら自分の手を見つめ自分がフェイトに救われたことをまた思い出す。

「さて！それじゃ、ブルーノ君準備に行きましょうか？」

「あ、はい。皆が集まるのは久しぶりですからね。僕も張り切っち

やいますよー!」

「それじゃ、レッツラゴー」

「ゴー」

楽しそうな2人であった。

「リンディさん!こっちの料理できましたよ!」

「さすが、ブルーノ君ね。頼りになるわあ」

「え?僕って頼りになる子?」

パーティーのために料理を作っているリンディとブルーノ。頼まれていた料理ができたのでリンディに知らせに行く。その報告を聞いてリンディは笑顔でブルーノを褒める。その言葉にブルーノはまんざらでもないような顔になる。

「あ、母さん!アルフ!ブルーノ!」

「お久しぶりで〜す!」

「皆!久しぶり!」

できた料理を並べていると自動ドアが開く音がした。入って来たのは、集合をした魔導師たちだった。ブルーノは久しぶりに皆に会えて喜びを隠せない様子だ。

「お、ブルーノ久しぶりじゃねえか！」

「ほんまに久しぶりやなあ…半年ぶりやったかな？」

「はい。私達は任務が忙しくてあまり会えませんでしたから」

久しぶりにブルーノに出会えて魔導師メンバーも喜んでいて、全員集まったところで楽しいパーティーの始まりだ！

「あ！そういえば、フェイトちゃん！あの子達の新しい写真持ってきてる？ヴィータちゃん達にも見せてあげようよ」

「あの子達？」

「ほらアレよ。フェイトちゃんが仕事先で出会った子供達」

不意になのが飲み物を持ちながら思い出したようにフェイトにとあるものを他の皆に見せるそうに仕向ける。それはフェイトが保護した子供達の写真である。

シグナムは何のことだか分からずシャマルに問いかける。シャマルは小皿の食べ物を突きながら分かりやすく説明する。

「執務官の仕事で地上とか別世界に行った時にね、事件に巻き込まれちゃった人とか、保護が必要な子供とか…」

モニターを出し画面を複数切り替えながら説明をするフェイト。ブルーノはそれに続くように説明を続ける。

「僕も会った事あるけど、とても元気な良い子達ばかりだったよ。僕も楽しくてしょうがなかったよ！それに手紙とか送ったり、顔を出しに行くうちに懐かれちゃって」

「フェイトちゃんとブルーノさんって子供に好かれますもんねえ」

「あー！エリオ、見ないうちに大きくなっただなー！」

写真を見ながらブルーノは笑顔で皆に子供達の事を喋る。なのはは違う写真を見ながらフェイト達が子供に好かれる事を説明。

そんな中、とある写真をはやてが見て会った事のある子供だったため、めずらしく大きくなった事に喜ぶ。ヴィータはその写真を見て「へえ」とプロフィールのようなものを見て声を漏らす。

「少し前からフェイトが保護をした子だったよね？僕はまだ会った事が無いから会ってみたいなあ」

「そのうち一緒に会いに行こうよ。エリオもきつと喜ぶよ！」

自分が会ってないことを思い出し少し会ってみたいと思うブルーノ。フェイトはだったら今度一緒に会いに行こうとブルーノに言う。

「フェイトちゃんが専門の古代遺産ロストロギアの私的利用とか違法研究の調査とかだと、子供が巻き込まれる事が多いから…」

「うん。寂しい事だけどね、特に大きな魔力や失天技能のある子供は…」

「だから、それをお前が救って回っているのだろう？」

「そーだよ」

悲しい顔で語るフェイト。親がない境遇は自分も分かるから……。そんなフェイトをシグナムとアルフがフォローをするように言う。

「子供が自由に未来を見られない世界は大人も寂しいですから……」

「未来……か。（遊星……君は未来を……切り開けたのかな？）」

多くの写真を見つめながらフェイトは子供達の未来の話をする。そんなフェイトの言葉にブルーノは遊星の事を思い出す。自分が信じた男は、未来を切り開けたのだろうか……と。

「はいは……い！それでは、パーティーも盛り上がっているところで！ここで！デュエルを開始したいと思いま……す……！」

「お！本命が来たぜ……！」

「ふ、私も準備は万端だ！」

パーティーが盛り上がってきて良い感じになってきたところではやがてマイクを持ち司会者風にデュエルを開始すると宣言する。

それを聞いた皆は待つてました！と言いたげに何処から出したのかデュエルディスクを装着して構えていた。

「それじゃ！最初は誰から行く？」

「はい！私……！」

「お！フェイトちゃんやる気満々やなあ。それじゃ、対戦相手は誰が良い？」

周りを見回しながら誰が行くと聞くはやて。それに早々と手を上げたのはフェイトだった。そのやる気に満ちた顔はブルーノも微笑ましく見ていた。

「じゃあ……ブルーノ！！」

「おおつと！ここでライディングデュエルの創設者！ブルーノさんにいったあ！！さあ！ブルーノさん！お受けしますか？」

「僕？……良いよ」

少し考える素振りを見せたフェイトだったが、初めから決めていたかのようにブルーノの方に指を刺す。ブルーノも少し考える素振りを見せて、同じように初めから決めていたかのように了承する。

「マジかよ！？ブルーノがデュエルするところなんて初めてじゃねえか？」

「ああ。ライディングデュエルを創設させたのは良いが、その本人は1度もデュエルをしていなかったからな」

「うん。ミッド中でもブルーノさんのデュエルが見てみたいって言う人達がたくさんいるし……」

「これは……面白くなりそうだね」

ざわめく魔導師。そう、ブルーノはこの世界：いや、ミッドチルダにライディングデュエルを創設させたのは良いが、その本人は1度もデュエルをしてはいない。した事と言えば、専用のD・ホイールの開発に関わったり、ライディングデュエルの極意などを教えたくらいだ。

だからこそ、ここにいる誰もがブルーノがデュエルすることに驚くが驚きの中にワクワクした思いも湧き出ている。

「それじゃ、移動しようか？」

「うん！」

今ブルーノ達が来ているところは景色が美しいと評判の世界だ。そこで、ライディングデュエルをするらしい。

フェイトはバリアジャケットに変えバルディッシュをディスクモードに変化させる。ブルーノは自分の愛機デルタイーグルに乗りライディングスーツになって準備をしていた。

「準備は良いか？」

「うん！」

エンジンをかけてフェイトに準備はできたか？聞く。フェイトは元気に返事をしてブルーノの隣に並ぶ。

「それにしても…ブルーノってよお何か感じが変わってねえか？」

「ああ。私には分かる。今のブルーノは…闘う戦士だ」

「楽しみですう。あのライディングデュエルの創設者のブルーノさんのデュエルが見られるなんて！これは、データをしっかりと取っておかなくちゃですね！」

少し離れたところで観戦をしている他のメンバーはパーティーの料理の残りを持ってきて楽しく見ている。

「それじゃー！」

「うん！フィールド魔法！《スピード・ワールド3》ー！」

「セツトー！」

『デュエルモード・オン。ライディング・ロードを構築シマス』

ここで、《スピード・ワールド3》の説明をします。基本《スピード・ワールド2》と変わりませんが、『ライディング・ロード』と言われる、魔力で構築された道を作ることができる。つまり、いつでも何処でもライディングデュエルができると言う事です。

これこそ…魔法と機械が生み出した。新たなライディングデュエルだ。

「ライディングデュエルアクセラレーションー！」

ブルーノLP4000 手札5 SPCO

フェイトLP4000 手札5 Spc0

そして、構築が終わった道をデュエリスト達は駆け抜ける。

「最初のコーナーを取った方が先攻だ。僕のスピードについてこれるか？」

「負けない!!」

デルタイーグルのスピードを上げフェイトから距離を離すブルーノ。フェイトはそれに負けじとスピードを上げブルーノに近づく。

そして、第1コースを取ったのは……。

「私が先攻だよ!ドロー!」

手札5 6

フェイトだった。ブルーノは追い抜いたフェイトを見て、クスッと苦笑をする。まさか自分が追い抜かれるとは……彼女だったら……。そう思いながら駆け抜ける。

「私は《シールドウィング》を守備表示を召喚!カードを1枚セツトしてターンエンド!」

シールドウィング

効果モンスター

星2 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻

0 / 守 900

このカードは1ターンに2度まで、戦闘では破壊されない。

フェイトLP4000 手札4 Spc0
場 シールドウイング 伏せ×1

フェイトの場に刃のような羽をしたモンスターが現れる。先攻を取ったフェイトはまずはブルーノの実力を見るために守りを固めた。

「僕のターン！」

ブルーノ手札5 6 Spc0 1
フェイトSpc0 1

「（相変わらず遊星と似たような戦法だ。だけど、今のフェイトでは『奴等』には勝てない！）相手フィールドにモンスターが存在し自分フィールドにモンスターが存在しない時このモンスターは特殊召喚できる！カモン《TG ストライカー》！さらに《TG ワーウルフ》を特殊召喚！」

TG ストライカー
チューナー（効果モンスター）
星2/地属性/戦士族/攻 800/守 0
相手フィールド上にモンスターが存在し、
自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、
このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
フィールド上に存在するこのカードが破壊され
墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時、
自分のデッキから「TG ストライカー」以外の

「TG」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

TG ワーウルフ

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 獣戦士族 / 攻1200 / 守 0

レベル4以下のモンスターが特殊召喚に成功した時、

このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時、

自分のデッキから「TG ワーウルフ」以外の

「TG」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

ブルーノのフィールドに一気にモンスターが2体も召喚された。これにフェイトも驚きを隠せない。

「さらにレベル3《TG ワーウルフ》にレベル2《TG ストライカー》をチューニング！シンクロフライトコントロール！リミッター解放、レベルファイブ！ブースター注入120%！リカバリーネットワーク、レンジ修正！オールクリアー！GO、シンクロ召喚！」

ロボットののような口調になった事にフェイトはもちろん観戦しているメンバーも驚く。

「カモン、《TG パワー・グレイディエーター》！」

TG パワー・グレイディエーター

シンクロ・効果モンスター

星5 / 地属性 / 戦士族 / 攻2300 / 守1000
チューナー+チューナー以外の「TG」と名のついたモンスター1
体以上

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、
その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

フィールド上に存在するこのカードが破壊された時、
自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

2体のモンスターが1つになり1体のモンスターとなりてフィールドに現れる。その姿は、力持ちとでも言いたげなごつい姿だった。

「バトル! 《TG パワー・グラディエイター》で《シールドウィング》を攻撃!」

「《シールドウィング》は1ターンに2度戦闘では破壊されないよ!」

「あまいぞフェイト。このモンスターは貫通効果を持っている。マシナイズ・スラッシュ!」

パワー・グラディエイターの斧がシールドウィングに当たる。しかし、その硬い鉄のような翼で防ぐ。フェイトは戦闘破壊されないと言うがブルーノはフツと笑いモンスターの効果を説明する。

フェイトLP4000 2600

「うう!」

「カードを2枚セットしてターンエンド！どうしたフェイト！その程度の実力じゃ、僕にはおるかこれから闘う敵にも勝てないぞ！」

ブルーノLP4000 手札2 Spc1
場 TG パワー・グラディエイター 伏せx2

ターンの終了を宣言しブルーノはフェイトの叫ぶ。それはこれからの闘いのことだ。フェイトは何のことだか分からないと言う顔になる。

「（ブルーノは一体何を言いたいんだろう？…これから闘う敵？…考えてみようがない！今はブルーノに勝つことだけを考えよう！）私のターン！」

フェイト手札4 5 Spc1 2
ブルーノSpc1 2

「《Sp・エンジェル・バトン》を発動！Spcが2つ以上ある時デッキから2枚ドロ―できる！その後手札から1枚墓地に送る！」

Sp・エンジェル・バトン

通常魔法

自分用スピードカウンターが2つ以上ある場合に発動する事ができる。デッキからカードを2枚ドロ―し、その後手札1枚を墓地へ送る。

フェイト手札5 6 5

スピードレベル
Spこれはスピードに世界で使われる魔法。通常の魔法を使えばライフが2000ポイント減るが、Spは違う。この魔法カードは決められたSpCの数があればあるほど強力な物ができる。フェイトが使ったのは手札増強と墓地絶やしができるカードだ。

ジャンク・シンクロン
「私を召喚！その効果により墓地から《ボルトヘッジ・ホック》を
守備表示で特殊召喚！」

ジャンク・シンクロン
チューナー（効果モンスター）

星3 / 闇属性 / 戦士族 / 攻1300 / 守 500

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル2以下のモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚することができる。

この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

ボルト・ヘッジホック

効果モンスター

星2 / 地属性 / 機械族 / 攻 800 / 守 800

自分フィールド上にチューナーが表側表示で存在する場合、

このカードを墓地から特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚したこのカードはフィールド上から離れた場合、ゲームから除外される。

フェイトのキーカードの1枚ジャンク・シンクロンが現れる。そして自らの効果で墓地より先ほど送ったのだらうボルト・ヘッジホックを呼び出した。

「行くよ！レベル2《シールドウイング》にレベル3《ジャンク・シンクロン》をチューニング！集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！シンクロ召喚！いでよ、《ジャンク・ウオリアー》！」

ジャンク・ウオリアー

シンクロ・効果モンスター

星5 / 闇属性 / 戦士族 / 攻2300 / 守1300

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上このカードがシンクロ召喚に成功した時、

このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする。

ジャンク・シンクロンは背中のエンジンを鳴らし星の球となりボルト・ヘッジホックを包み込む。そして光さす道となり1体のモンスターが現れた。

「《ジャンク・ウオリアー》がシンクロ召喚に成功した時、自分フィールド上のレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップさせる！パワー・オブ・フェローズ！」

ジャンク・ウオリアー

攻2300 3100

「攻撃力3100…やるなフェイト」

「バトル！《ジャンク・ウオリアー》で《TG パワー・グラディエイター》に攻撃！スクラップ・フィストツッ！！」

ジャンク・ウォリアーは背中中のバーニアからエネルギーを噴出させ突っ込みパワー・グラディエイターに拳を振りかざす。

「畏カード発動！《バトル・スタン・ソニック》！このカードは相手の攻撃を無効にする！」

「防がれた！？」

「フェイト！その程度の戦略が僕の通用すると思ったのか！さらに《バトル・スタン・ソニック》は手札のチューナーモンスターを特殊召喚できる！僕は《TG サイバー・マジシャン》を特殊召喚！」

バトル・スタン・ソニック（アニメオリジナル）
通常罫

相手モンスター1体が攻撃してきた時に発動する事ができる。その攻撃を無効にする。その後、自分の手札からレベル4以下のチューナー1体を特殊召喚する。

TG サイバー・マジシャン
チューナー（効果モンスター）

星1/光属性/魔法使い族/攻 0/守 0

自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを

「TG」と名のついたシンクロモンスターのシンクロ素材とする場合、

手札の「TG」と名のついたモンスターを

他のチューナー以外のシンクロ素材にする事ができる。

フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られたター

ンのエンドフェイズ時、
自分のデッキから「TG サイバー・マジシャン」以外の
「TG」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

ジャンク・ウォリアーの拳は紫色のバリアーにより防がれる。フェイトは防がれたことに少し驚く。
ブルーノはそんなフェイトに戦術があまいと何かを教えるように叫ぶ。

「くっ！私はカード1枚セットしてターンエンド！」

フェイトLP2400 手札3 Spc2

場 ジャンク・ウォリアー ボルト・ヘッジホック 伏せ×2

「僕のターン！」

ブルーノ手札2 3 Spc2 3

フェイトSpc2 3

「僕は《TG サイバー・マジシャン》の効果を発動！このモンスターをシンクロ召喚に使う場合手札のモンスターで代用できる！僕は手札のレベル4《TG ラッシュ・ライノ》とフィールドのレベル1《TG サイバー・マジシャン》をチューニング！」

「すごい、私もシンクロ召喚の展開なら自信があるけど、ブルーノも負けていない」

「リミッター解放、レベル5！ブースターランチ、OK！インクリネイション、OK！グランドサポート、オールクリアー！GO、シ

ンクロ召喚！カモン、《TG ワンダー・マジシャン》！」

TG ワンダー・マジシャン

シンクロ・チューナー（効果モンスター）

星5 / 光属性 / 魔法使い族 / 攻1900 / 守 0

チューナー＋チューナー以外の「TG」と名のついたモンスター1
体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、

フィールド上に存在する魔法・罫カード1枚を選択して破壊する。

フィールド上に存在するこのカードが破壊された時、

自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

また、相手のメインフェイズ時、

自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを

シンクロ素材としてシンクロ召喚する事ができる。

光が消えるとフィールドにピンクの髪をして3つに別れた奇妙な帽子を被ったモンスターがいた。

「《TG ワンダー・マジシャン》はシンクロ召喚に成功した時、フィールドの魔法・罫カードを1枚は破壊する。僕は君の左のカードを破壊！」

「《パワー・フレーム》が!？」

「行くよ、フェイト！今から君達が知らない戦術を見せてあげよう！」

「私達が知らない…戦術？」

「クリアマインドッ!!」

「え? な、何! ?」

モンスターを召喚し次に何をするかと思っていたフェイトにブルーノは振り向き、フェイトに新たな戦術を見てやると言っていてデルタイグルのスピードを上げる。

「リミッター解放、レベル10! メイン・バスブースター・コントロール、オールクリアー! 無限の力、今ここに解き放ち、次元の彼方へ突き進め! GO、アクセルシンクロ! !」

「き、消えた! ?」

「カモン、《TG ブレード・ガンナー》!」

TG ブレード・ガンナー(アニメ効果)

アクセルシンクロ・効果モンスター

星10/地属性/機械族/攻3300/守2200

シンクロチューナー1体+チューナー以外のシンクロモンスター1体以上

手札からカード1枚を墓地へ送る事で、相手の魔法・罠による

このカードへの効果を無効にする。

相手ターンに1度、このカードはゲームから除外する事ができる。

この効果で除外したこのカードは、相手ターンのエンドフェイズ時に自分フィールド上に戻ってくる。

このカードが戦闘によって破壊された時、このカードのシンクロ召喚に使用した

素材1組が自分の墓地に揃っている場合、それらを自分フィールド上に

特殊召喚する事ができる。

モンスターと一緒にブルーノはフェイトの目の前から姿を消した。何処に行ったか探すフェイトだったが、次の瞬間背後から緑色の戦士と共にデルタイーグルに乗ったブルーノが現れた。

「シンクロモンスター同士が…シンクロした!？」

「これがシンクロを超えたシンクロ、『アクセルシンクロ』だっ!」

「アクセルシンクロ……」

フェイトはその強大な力を持つモンスターを見つめながら小さくブルーノの言った言葉を繰り返す。シンクロモンスター同士のシンクロ…『アクセルシンクロ』…この力を再びブルーノは来る敵が襲い掛かってくる前に教えなくてはならない。

そう…かつて元の世界にいた時に…不動遊星に教えたように……。

これを取得するには…全てを風に任せ、音速を超え、何よりも速く。

フェイトに…できるか？

第1話「自分の使命」（後書き）

こんな感じですよ。ブルーノのモンスターはアクセルシンクロモンスターとデルタアクセルモンスター以外はOCG効果でいこうと思います。さらに、ブルーノのデッキはこっちの世界に来て少し強化されたとお考えください。

フェイトのデッキですが、見た通り遊星デッキです。しかし、少しフェイトは改造しています。遊星が使っていないカードも出てきますが…大丈夫ですか？

それにしても…カードのテキストを入れると…余計に疲れる…ふう…。

誤字脱字の指摘、感想などお待ちしております。それにしても…ブルーノの性格ってこれであってたかな？

それでは、次回もお楽しみに！！

第2話「これからの敵」(前書き)

今回は前より短いです。

第2話「これからの敵」

「行くぞ！《TG ブレード・ガンナー》で《ジャンク・ウォリアー》を攻撃！シユート・ブレード！」

「させない！畏発動！《くず鉄のかかし》！相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする！」

くず鉄のかかし

通常畏

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手モンスター1体の攻撃を無効にする。

発動後このカードは墓地に送らず、そのままセットする。

「無駄だよフェイト！《TG ブレード・ガンナー》の効果発動！手札を1枚墓地に送ることで君の《くず鉄のかかし》の発動を無効にし破壊する！」

「そんな！？」

ブレード・ガンナーの攻撃をくず鉄のかかしで防ごうとしたフェイト。しかし、アクセルシンクロモンスターのはそんな小細工は通用しなかった。

「これで守る物は無くなった！バトル続行、ブレード・シユート！」

フェイト2400 2200

「っ！《ジャンク・ウォリアー》が…！？」

「僕はこれでターンエンドだ！フェイト！これがアクセルシンクロ
モンスターの力だ！」

ブルーノLP4000 手札1 Spc3
場 TG ブレード・ガンナー 伏せ×1

「私のターン！」

フェイト手札3 4 Spc3 4
ブルーノSpc3 4

「（あれがブルーノの本当の力？……すごい！こんな強い相手と私は闘っている…勝ちたい！こんな強い相手に…）よし！私は《ボルト・ヘッジホック》をリリースして《サルベージ・ウォリアー》をアドバンス召喚！」

サルベージ・ウォリアー

効果モンスター

星5 / 水属性 / 戦士族 / 攻1900 / 守1600

このカードがアドバンス召喚に成功した時、

手札または自分の墓地からチューナー1体を特殊召喚する事ができる。

「そして《サルベージ・ウォリアー》がアドバンス召喚に成功した時、墓地のチューナーを1体特殊召喚できる！私は《ジャンク・シ

ンクロン』を特殊召喚！」

サルベージ・ウォリアーが空間に鎖を入れ込むとそこからジャンク・シンクロンが鎖に繋がれて姿を現す。

「（あの子を出したいけど…今は目の前にいるモンスターを破壊する！）レベル5『サルベージ・ウォリアー』にレベル3『ジャンク・シンクロン』をチューニング！集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。光さす道となれ！シンクロナ召喚！粉碎せよ、『ジャンク・デストロイヤー』！」

ジャンク・デストロイヤー

シンクロナ効果モンスター

星8 / 地属性 / 戦士族 / 攻2600 / 守2500

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上このカードがシンクロナ召喚に成功した時、

このカードのシンクロナ素材としたチューナー以外のモンスターの数まで

フィールド上に存在するカードを選択して破壊する事ができる。

「『ジャンク・デストロイヤー』の効果発動！このモンスターがシンクロナ召喚に成功した時、チューナー以外のシンクロナ素材に使用したモンスターの数だけフィールドのカードを破壊する！私がシンクロナ素材に使用したモンスターは1体！よってブルーノのモンスターを破壊するよ！タイダル・エナジー！」

ジャンク・デストロイヤーからすさまじいほどのエネルギーがブルーノのモンスターを襲う。だが、ブルーノは冷静に対処する。

「効果破壊できたか。だけど、そう簡単にはアクセルシンクロモン
スターは破壊できない!《TG ブレード・ガンナー》は自らを除
外できる!」

「相手のターンで除外!?これじゃ!」

「そう、対象がいなくなった事により《ジャンク・デストロイヤー
》の効果は不発になる!」

エネルギーが届く前にブレード・ガンナーはフィールドから姿を消
した。その効果にフェイトは驚くばかりだった。

「だったら!《ジャンク・デストロイヤー》でブルーノに攻撃!デ
ストロイ・ナツクル!」

ブルーノLP4000 1400

「ぐう!」

「よし!私はカード1枚セットしてターンエンド!」

「君のエンドフェイズ時の《TG ブレード・ガンナー》はフィー
ルドに戻ってくる!」

「え?も、戻ってくるの!?」

フェイトLP2200 手札2 Spc4
場 ジャンク・デストロイヤー 伏せx1

フェイトのエンドフェイズにブレード・ガンナーは次元の狭間から戻ってきた。まだ、効果を把握していないフェイトはやっぱり驚く。

「僕のターン！」

ブルーノ手札1 2 Spc4 5

フェイトSpc4 5

「さっきの攻撃は効いたよフェイト。だけど！このターンで君は終りだ！罨発動！《TG X3 - DX2》！この効果により墓地の「TG」と名のついたモンスター《TG ストライカー》、《TG ワンダー・マジシャン》、《TG サイバー・マジシャン》をデッキ戻しシャッフルし2枚ドロロー！」

ブルーノ手札2 4

「そして《TG カタパルト・ドラゴン》を召喚！このモンスターは1ターンに1度、手札のレベル3以下のチューナーを特殊召喚できる！僕は《TG ジェット・ファルコン》を特殊召喚！」

TG カタパルト・ドラゴン

効果モンスター

星2 / 地属性 / ドラゴン族 / 攻 900 / 守 1300

1ターンに1度、手札からレベル3以下の

「TG」と名のついたチューナー1体を特殊召喚する事ができる。

TG ジェット・ファルコン

チューナー（効果モンスター）

星3 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻 1400 / 守 1200

このカードがシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、相手ライフに500ポイントダメージを与える。

「さらに、レベル2《TG カタパルト・ドラゴン》にレベル3《TG ジェット・ファルコン》をチューニング！リミッター解放、レベル5！ブースターランチ、OK！インクリネーション、OK！グランドサポート、オールクリアー！GO、シンクロ召喚！カモン、《TG ワンダー・マジシャン》！」

再びシンクロチューナーであるワンダー・マジシャンが現れた。このモンスターは単体でも効果も強力だ。

「《TG ジェット・ファルコン》がシンクロ素材に使用され墓地送られた時、プレイヤーに500ポイントのダメージを与える！」

フェイトLP2200 1700

「そして、君も先ほど見たから分かると思うが、このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、魔法・罠カードを1枚破壊する！」

「うっ！」

「バトル！《TG ブレード・ガンナー》で《ジャンク・デストロイヤー》を攻撃！ブレード・シュート！」

フェイトLP1700 1000

「止めだ！《TG ワンダー・マジシャン》でダイレクトアタック！マシンナイズ・ソーサリー！」

「きゃあああっ！！」

フェイトLP10000

「ううう…負けちゃった…ブルーノ強いね」

デュエルが終了し元の場所に戻ってきてきてペタンと座り込むフェイト。ブルーノはヘルメットを取りながらフェイトに笑顔で話しかける。

「デュエルは久しぶりだったけど、本当に楽しかったよ」

「フェイトちゃん！ブルーノさん！」

「あ、なのはー！！」

観戦していたメンバーがブルーノ達に駆け寄って来る。そして、合流したと瞬間…。

「おい！何なんだ！あのシンクロは！？」

「そや！私もすっごく！気になるー！！」

「教えてくださいさー！ですう！」

さっきにデュエルで見たアクセルシンクロのことが気になって仕方がない観戦メンバーはブルーノに詰め寄りそれを聞こうとする。

「ちょ、ちょっと！そんなに押さないでよ！ヴィータ！暴力反対！
！」

「あ、こら！逃げるな！！！」

「皆！ブルーノさんを捕まえるんや！！！」

『おおおっ！！！！』

D・ホイールに乗る暇がなかったためブルーノは走って皆から逃げる。そんな逃げたブルーノをはやて達はなんとしてもアクセルシンクロの事が聞きたく一目散に追いかける。

「大丈夫かなブルーノ？」

「にははは 皆さっきにの事が気になってしょうがないんだよ。それに、フェイトちゃんが負けるなんて…すごいねブルーノさん
つて！！！」

「うん。私、もう1度でも…ううん。何回でも闘いたくなった！」

「それでこそフェイトちゃんだよ！」

はやて達に追いかけられるブルーノを見つめながらフェイトはデュエリストとしての魂がメラメラと燃え上がっていた。

そんなフェイトをなのはは笑顔で見つめる。自分の親友がここまで燃え上がっているのは初めてだから。

「だ、誰か…！助けて…！！！！！」

『待てええっ！！！！』

楽しそうなブルーノ達だった…。

「全然楽しくないよおおっ！！！！」

～夜 ハラオウン家リビング～

パーティーが終りメンバーはそれぞれの家に帰宅した。とても、にぎやかなパーティーだった。その中でぐったりと倒れている人物が1人。

「疲れたあ…皆酷いよ…」

そう、あれからずっと逃げていたブルーノは結局捕まってしまったのだ。そして、アクセルシンク口の事を数時間みっちり絞られたが、ブルーノは「明日話すから！許してえ！！」と言ってなんとか開放されて今ソファで倒れている。

「大丈夫？何か飲み物持ってこようか？」

「うん。み、水をお願い…」

「分かった」

ブルーノを心配して顔を覗き込む。ブルーノは力無い声で水を要求した。フェイトは頷き、水道の水をコップに入れブルーノに差し出

す。

「ゴク…ゴク…はあ…生き返った。ありがとうフェイト」

「うん。どういたしまして。…ねえブルーノ」

「何？」

「クリアマインドとアクセルシンクロって何？私に何か関係あるの？」

「……」

喉を鳴らし水を一気に飲み干すブルーノ。フェイトは少し気を使って聞かなかったが、やっぱり気になったのであの時の事をブルーノに話す。

「話す前に君に教えておく事がある」

「何？」

「これから君達が闘う相手の事だよ」

「私達が闘う…相手？それっていったい？」

真剣な顔でブルーノは話をする。フェイトはそんなブルーノを見て自分も顔を引き締めた。そしてブルーノが言った相手は……。

「イリアステル…僕の考えが正しければ…ね」

「イリアステル……」

ブルーノの口から話された相手はイリアステル。この組織の名が何故この世界に？まさか、ブルーノと同じでこの世界に……送られたのか？

これが本当だったとしたら……今のフェイト達では……おそらく……勝てないだろう。

だからこそ……ブルーノが……教えるのだろう……。

アクセルシンクロを……。

第2話「これからの敵」(後書き)

えっと…変な終わりかたですみません。

次回はいつになるかなあ……とにかく！次回はブルーノが皆にこれから闘う敵に事を話します！

お楽しみに！！

第3話「動き出す歯車」(前書き)

ずいぶんと久しぶりです。

かなり誤字脱字が多いかもしれませんが…今回は…燃え尽きました
……。

第3話「動き出す歯車」

「僕が彼らを見たのは、ちょうど仕事に帰りだった。いつもの通りデルタイーグルで道路を走っていたら…」

「その…イリアステルっていう人達が現れたの？」

「いや、正確には彼らが作った「ディアブロ」というライディング・ロイドだよ」

深刻そうな顔をしているブルーノを心配するようにフェイトは聞く。そんなフェイトの気遣いに嬉しく思いながら話を続ける。

「「ディアブロ」…僕がいた世界ではライディングデュエルをしているデュエリストを狙い、相手の事なんてお構い無しに強制的にバトルロワイヤルモードでデュエルをしてくるんだ」

「バトルロワイヤルモードって？」

「バトルロワイヤルモードっていうのは、強制的にスピードワールドを発動させタッグデュエルとは違い誰で攻撃できるルールさ。だが、ディアブロは相手を見つければ集団で襲うため誰もが太刀打ちできないんだ」

そう、これにより遊星達も苦戦した。その時はアンチノミーとなつたブルーノが助けなければいくら遊星といえどもやられていただろう。

「ブルーノは大丈夫だったの？」

「うん。あの時は何とか切り抜けられたからね」

「そう、良かった」

その言葉を聞き安心するように肩の力を抜くフェイト。

「話を続けるよ。ディアブロとあった僕は、必死に闘った。そして、確信したんだ。この世界に彼らが来ていると…」

「……その…イリアステルっていう人たちは…ブルーノの仲間なの？」

少し、聞きにくい空気だったが、勇気を振り絞って聞くフェイト。

ブルーノは肩の力を抜いて何かを思い出しているような顔で答える。

「うん。だけど…ここにいる彼らが僕の知っている彼らとは限らない。…もし僕が知っている彼らだったとしても…僕は闘う」

「どうして？ 仲間じゃなかったの？」

「仲間だからこそさ。彼らのしていることを…今度は僕が止めてみせる！」

「ブルーノ」

ニツコリと笑いフェイトにいうブルーノ。そんなブルーノを見てフェイトは微笑む。…っと、そこへリンディ達が帰ってきた。

「ただいまあ！」

「あらあら。お邪魔だったかしら？」

「！？ か、母さん！！」

「あはは」

一気に空気が変わってしまったテストロッサー家でした。

（無人世界ガナード）

無人世界ガナード…次元には複数の世界が存在する。その世界でも一番危険と言われているのがガナード。何故そう言われてきたのか。それは……。

「へへ、嬢ちゃん良い体しているねえ」

（ぶ、ブルーノさああん！ 本当に此処にあるんですかあ！！）

そう、ガナードには凶悪なデュエリストが集まる世界だったからだ。その集団の中に1人だけ少女がいた。それは、もっと強くなるためブルーノに言われてこの世界にやってきた高町なのはだった。

（た、確かに…奥の方に大きな神殿はありますけど…）

「へへ、嬢ちゃんよお！ 俺達と楽しい夜のライディングデュエルをやるうぜー！！」

「お！ いいねえ！」

『あはっははは！！！』

なのはを囲み楽しそうに笑うデュエリスト達。普通の女の子だったらここで弱気になり泣くのだろうがなのははそんな弱い女の子ではない。

（ここで、引いてちゃ…強くはなれない。私は…もっと強くなるんだ！！）

「そこをどいてください」

「ああん？」

デュエルディスクを構えてなのはは呟く。デュエリスト達はその声に反応して顔を向ける。

「もう一度言います。そこをどいてください」

「ずいぶんと強気な嬢ちゃんだなあ、おい。そんなにどいてほしければ…デュエルで俺達を負かしていきな！！」

そう言い周りにいるデュエリスト達はディスクを構える。

「元からそのつもり！！」

デッキから5枚引き飛び出すなのは。デュエリスト達と闘いながらなのははブルーノ達から言われたことを思い出す。

『イリアステル……最近噂のなっていたデュエリスト狩りをしていた組織の名ですか』

『うん。ただ、確信は持てない。僕が知っているイリアステルか。それとも他の組織がディアブロを操っているか』

『だけどよ…そのイリアステルって組織はお前が元いた世界にいるんだろ？ この世界みたいに次元を移動できる物がなくちゃできないんじゃない…』

疑問気味に言うヴィータ。それを聞いた皆も頷く。だが、ブルーノだけは違うことを考えていた。

(「彼」だったら可能だろうけど…ね)

『とにかく、来る敵に備えてなのは達にはやってほしいことがあるんだ』

『やってほしいこと？』

『新しい戦術…つまりみんなのデッキの強化やプレイングを高めることだね。始めは…フェイト、なのは』

『私？』

『??？』

ブルーノはなのはに何か本を差し出しフェイトとなのはに説明をする。

『フェイトには、僕が教えるよ』

(もしかして、あの時の…)

ブルーノとのデュエル…フェイトはそのことを思い出す。一方なのはブルーノから渡された本をジッと見つめる。

『なのはは「無人世界ガード」という所に行ってもらおうよ』

『へ？ あ、あのそっつて…』

『そっつて凶悪なデュエリスト達が集まる場所じゃねえか。まさか、そいつらとデュエルさせてプレイングを高めるのか？』

なのはの変わりにヴィータが喋ってしまう。なのはは「うん、うん」と頷く。若干震えているようだが…。そんななのはの様子を見てブルーノは笑顔で元気づける。

『大丈夫だよ、なのは。なのはだったらきつとやり遂げれる。僕なのはが誰よりも努力していることを知っているよ』

『ブルーノさん…』

『確かにガードは凶悪なデュエリストが集まる世界。そこでデュエルをすればプレイングはかなり高まるけど、僕の考えはそれだけじゃないよ』

元気づけると同時になのはに渡した本を開く。ページをぺらぺらとめくること数ページで止まる。そこにはこう書いてあった。

『大昔：この世界に大いなる災害を起こす悪魔が存在した。その悪魔は禍々しく紅蓮に輝き、力を欲する者を引き寄せる存在があった。人々はその力を求め集まり悪魔の餌となってしまう。だが、そんな悪魔も紅きの救世主により何とか封印できた。封印した悪魔の名は「スカーレット・ノヴァ」と言っ』

『もしかして… ガナードにデュエリストが集まる理由って…』
本を読み終わりなのはブルーノを見つめ自分の推測を言う。その推測にブルーノは頷きなのはの肩に手を優しく置く。

『危険かもしれないけど、なのはにはこの「スカーレット・ノヴァ」の力を自分の物にしてもらうよ』

『「スカーレット・ノヴァ」… 大なる災害をもたらし、絶対的な存在感を持つ紅蓮の悪魔… その悪魔の力を私が？ …… できるのかな？』

『な〜にびびってんだよ！ お前らしくねえぞ！』

『そやで！ あたし達が知っているなのはちゃんは、何事も恐れない不同のエース！』

『私達も来る敵に備えてできる限り強くなる。私的には残念だが… お前とテストロツサが切り札だ』
ジョーカー

『なのは。私も頑張るから… 一緒に強くなろうよ！ 皆のために…』
なのはを元気付けるように一人一人言葉を送る。その優しさに勇気を貰ったのか拳をギュツと握り締め宣言した。

『私…… 頑張るよ！ 皆が楽しくデュエルをできるように… 強くなつて戻ってくるよ…！』

『なのは… 頼んだよ』

皆が楽しむデュエルを守るため… 皆の笑顔のため… なにより、自分を信じて待っている皆のために負けられない。その決意を胸になの

はは突き進む。

(もっと…もっと！ 強くなるんだ…！)

デッキから5枚引き飛び出すのは。

くミッドチルダく

「どうした、フェイト！ そんな事ではクリアマインドまでには辿りつけんぞ！」

「はあ…はあ…」

こちらではフェイトがクリアマインドの境地への練習をしていた。何度も挑戦するもそう簡単にはいかず苦戦している。だが、ブルーノはそれでもフェイトならできる、と信じて厳しく言葉を投げる。

「すごい気迫だな」

「それほど、イリアステルという組織は強大なのだろう」

少し離れた所でシグナムとヴィータはフェイト達の練習を見学していた。自分達もなにかできるはずだ、と思いブルーノに指導を受けようと思いついて来たのだが忙しいようなので見学をしていたのだ。

「うーん…これじゃあ無理だな」

「ああ。やはり、自分達の力で強くならなければな！」

「おお！」

少しでも皆の役に立ちたいと思い2人はディスクを構えデュエルを始める。

（無人世界ガード）

フェイト達が訓練をしている一方、なのははガードにいるデュエリスト達を順調に倒し少しずつ目的の神殿に近づいている。

「《レッド・デーモンズ・ドラゴン》でセットモンスターを攻撃！
アブソリュート・パワー・フォー스ツ！！」

「ぐあー！！」

「そして、この瞬間レッド・デーモンズの効果発動！ デモン・メテオツ！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンの攻撃により相手の守備表示モンスターが全て破壊された。その中には、ナイトメア・トークンが存在していた。

「これで終わり！ ナイトメア・トークンの効果で1体につき800ポイントのダメージを与える！」

デュエリストLP12000

「次ツ！！」

デッキを元の枚数に戻し再びセット。自動でシャッフルされ5枚を引きながら振り向き叫ぶなのは。最初は所詮小娘程度と思っていたデュエリスト達だったが優れたデュエルタクティクスと圧倒的なパワーの前に圧倒されている。

「おい、なんなんだよ、この嬢ちゃんはやあ！」

「し、知るかよ!!！」

「1人ずつ倒していくのも面倒になってきちゃった。まとめてかかって来なさい!!！」

「っっひい!?!?!」

怯えながらもディスクを構える3人のデュエリスト達。普通なら1対3は圧倒的になのはが不利だが、なのはは違った。確実にライフを減らし、モンスターを破壊し、フィールドを制圧した。

「《レッド・デーモンズ・ドラゴン》《天刑王 ブラック・ハイランダ》《デーモン・カオス・キング》…このモンスター達って…」

「あ、ああ。管理局の……「白い悪魔」だ!!！」

「私は悪魔じゃありません!!！」

デュエリスト達に自分が悪魔だといわれて機嫌を悪くし一喝を入れるのは。だが、その言葉を聞かず言葉をどんどん続ける。

「でも、これじゃあ白い悪魔じゃなくて、「白黒の悪魔」じゃないか?」

「いや、こじは「紅白の悪魔」がいいと思うぞ?」

「紅白じゃなくて、白紅じゃないか?」

などと、言いたい放題なのはの通り名?を改善していくデュエリスト達。その言葉を聞きなのは我慢の限界が来たらしく。体の周りにピンク色の魔力が解き放たれた。

「……畏発動…《トラップスタン》」

「」「」「」

「私は…私は…普通の女の子です!! 3体のモンスターでダイレクトアタックッ!!!」

「」「」「あああっ!!???」「」「」

3つの恐怖によって一気にライフが0になってしまつ。その姿はまさに、「悪魔」という名が似合うだろう。だが、そんなこと言つては可哀相と思う。なのはも女の子なのだから…本当は「優しさ」「の塊のような人物だと仲間達は知っている。

(ふう…後、半分……頑張らなくちゃッ!!)

くミッドチルダく

「これで、止めや!! 《ブラック・フェザー・ドラゴン》のダイレクトアタックッ! ノーブル・ストリームッ!..!」

「ぐああッ!?!?」

ディアブローLP5000

時は夕方…はやて、リインフォース、シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、シャマルの夜天の主と守護騎士達は、二手に別れてディアブローの除去をしていた。フェイトとブルーノはクリアマインドへの訓練を一度終了させ同じく除去にあたっている。

「ふい…確かに厄介なロボットやなあ。まさか、いろんな属性を狙ってモンスターを破壊するんやもん。正直、闇主体の私にとって…相性最悪かも」

「そうですねえ…私も倒すのがやっとでしたよ」

「あいつら、負けそうになるとうじゃうじゃと勝手に入り込んでくるからウザイったらねえよ!」

「ああ。これはあのカードを使うことになるかもな」

お互いに一息つき、ディアブロー達とのデュエルの感想を言い合つ。そんな中、シグナムは深刻な顔でヴィータを見て意味ありげな言葉を言う。

「ああ。あのカードだったら……だけどよお…操れると思うか?」

「己の力を信じる。私達に託されたのだ…やるしかない…いや、やっつて見せるんだ!」

「 ああ！」

そう言い見詰め合う2人。そんな2人の姿を見てはやては少し悪戯したくなってきた。しまった。

「ふふ…」と不気味な笑みでシグナム達をからかう言葉を言う。

「なんや、なんや？ 2人してなんか良い不困気やなあ…もしかして、百合か？」

「「ち、違う(ます)!!!?」」

「はやてちゃん、百合とはなんですか？ 花の種類のことでしょうか？」

「え〜と、それはやなあ…」

「教えなくいいです!?!」

「そ、そうだよ！ さっさとシャルマル達と合流しようぜ！」

あまり知識が無いリインフォース・ツヴァイは純粹に何の事だか分からず首をかしげながら聞く。はやては楽しそうに説明しようとするも、シグナム達が全力で止める。

「 いったい…百合とは何のことなのでしょう？」

そればかり気になるリインフォース・ツヴァイであった…。

第3話「動き出す歯車」(後書き)

燃え尽きました…誤字脱字があっても…修正はしばらく無理だと思
います…たぶん…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3677t/>

遊戯王リリカルなのは5 D's ~絆を繋ぐ歯車~

2011年7月14日23時17分発行